広島大学留学生の状況と支援に関する研究
―心理相談支援および図書館による学業支援―

中矢礼美・庄ゆかり・小島奈々恵

本研究は広島大学に在籍する留学生全員に対して行なった「留学生支援調査」(2009年度前期・後期の２回）の結果に基づき、広島大学在籍留学生の満足度と現状、今後の支援のあり方について検討するものである。本調査は、2001年から毎年継続的に行っている調査であるが、今年度はいくつか調査項目を追加して、より詳細な留学生の状況を把握するように努めた。前期支援調査の構成は、「留学生満足度（例年同様)」「学内情報収集力・交流活動・就職活動（新規)」「フィードバック型の自由記述による問題（例年同様)」「国際交流ボランティア活動希望（例年同様)」である。後期支援調査は、「留学生満足度（例年同様)」「フィードバック型の自由記述による問題（例年同様)」「国際交流ボランティア活動希望（例年同様)」に加えて、留学生の学習・研究に大きな影響を与える「図書館活用状況」を加えた。まず、前期後期の調査結果から全体的な満足度状況と異文化適応状況の検討を行い、次いで自由記述の傾向と主要な問題対策について指摘し、最後に図書館オリエンテーションの参加と活用状況について検討し、今後の課題と解決策を提示する。

なお１から４については中矢、5については小島、6については庄が執筆担当した。

１．調査対象および回答者の属性

（１）前期支援調査回答者の属性（回答者数 282/配布数 986）

女性	男性			
151人	131人			
20-25歳	26-30歳	31-35歳	36歳以上	
132人	81人	59人	10人	
中国	韓国	インドネシア	マレーシア	そのほか
150人	12人	7人	7人	106人
学部生	大学院生	研究生	そのほか	
38人	202人	31人	13人	
私費	国費	そのほか		
171人	105人	6人		
理系	文系	そのほか		
109人	136人	37人		

前期調査では、986名に配布したところ、回答者数は282人であった。年齢別にみると、20歳-25歳の回答者が132人と最も多い。回答者の出身国は中国150人が最多であり、学籍別では大学院生が202人と最も多い。

（２）後期支援調査回答者の属性　（回答者数 291/配布数 1062）

女性	男性			
155人	136人			
20-25歳	26-30歳	31-35歳	36歳以上	
90人	92人	55人	11人	
中国	韓国	インドネシア	マレーシア	そのほか
174人	6人	6人	7人	97人
学部生	大学院生	研究生	そのほか	
5人	198人	78人	10人	
私費	国費	そのほか		
191人	96人	1人		
理系	文系	そのほか		
94人	141人	45人		

後期支援調査では、1062人に配布して回答者数は291人であった。回答者の属性をみると、年齢別では26-30歳が最も多くなっている。そのほかの項目の傾向は前期と同様であり、中国出身者、大学院生が最多である。そして、国費より私費、理系より

文系の学生からの回答が多い。

（３）手続き

全学に所属する留学生（研究生、学部生、大学院生）に対して、質問紙調査を配布し、無記名で回答してもらった。質問紙調査は、各部局担当事務に前回の調査結果の報告と支援調査の意義と共にお願いの文章を添付して送った。質問紙を入れた封筒には、Ａ部局以外の部局には指導教員名と留学生の名前、学籍番号を付し、研究室単位で配布を依頼した。配布依頼の際には、担当職員と指導教員に前回の報告と依頼文書を添付して、協力を仰いだ。Ａ部局は、すべての学生がレターボックスにて郵便物を受け取るようになっているため、宛名なしとした。留学生向けにも前回の支援調査報告とその後の対応、個別対応についてはHPを示し、似たような問題がある場合には参照するように説明を行なった。このように、全留学生に対して「広島大学はいつもあなたの声を聞いています」というメッセージを伝え、「支援体制の整備を努力しています」ということを伝えることで、留学生に安心感と信頼感を伝えることを第一の目的とした。調査報告と「自分宛」のアンケート調査の効力が大きいことは、自由記述意見でよく書かれる「感謝文（「いつも私たちがどういう状況にあるかを心配してくださっていることが分かって、大変嬉しいです」など）」から理解することができる。

現在、学生への情報周知は「もみじ」に一元化してきているが、学生にとってはまだ「不特定多数者」に対する情報提供でしかないというイメージが強く、もみじ経由でのアンケートはあまり効果がないと推測できる。今後、大学はより効果的な方法で全学の留学生の状況把握、所属意識の強化と信頼感の向上のために継続調査を行い、確実なフィードバックをすることが求められる。

２．留学生の使用言語の特徴

前期・後期調査において、指導教員との会話では主に日本語を使う留学生は約61%存在するものの、論文執筆の際に日本語を使う学生は約50%となり、逆に英語での論文での読み書きの割合が10%増えている。指導の際の言語と学術で使う言語に差があるということは、研究の質の向上のためには留学生の日本語論文執筆能力を向上させるか、指導教員の英語での指導能力を高める必要があることを示している。

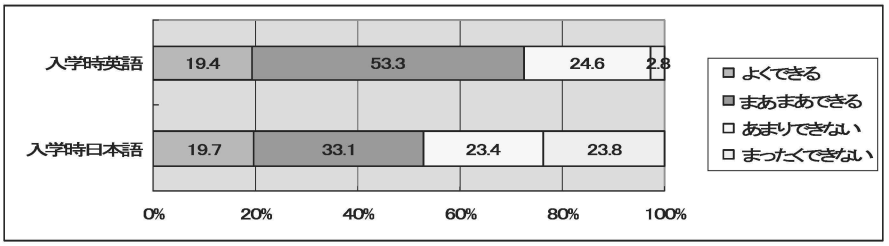
（人・%）

前期調査	日本語		英語		その他	
あなたは，論文の読み書きでおもにどの言語を使いますか.	144	51.1	136	48.2	2	0.7
あなたは，指導教員との会話でおもにどの言語を使いますか.	172	61.0	107	37.9	3	1.1
後期調査	日本語		英語		その他	
あなたは，論文の読み書きでおもにどの言語を使いますか.	144	49.5	130	44.7	17	5.8
あなたは，指導教員との会話でおもにどの言語を使いますか.	177	60.8	96	33.0	18	6.2

また、入学時の言語能力に関する自己評価としては、以下のように「よくできる」と回答した留学生は、英語で19.4%、日本語で19.7%である。「まあまあできる」は、英語で53.3%、日本語で33.1%となっている。学術論文を書く際にはもちろんのこと、

授業を受けるにあたっても、いずれかの語学が優れていなければならないことを考えると、日本語も英語にも大きな問題を抱えており、英語または日本語学習フォローが重要であるといえる。

＜入学時の留学生の言語能力に対する自己評価（後期調査）＞



３．留学生の学内情報活用・諸活動参加の特徴（前期調査より）

学外の諸活動参加状況をみる（下表）と、小中高等学校における国際理解教育事業に参加している人が 10.3％、社会教育機関での国際交流活動に参加している人が 6.4％であるのに対し、参加していない人が 52.2％と非常に高い。留学生センターでは、留学生のための国際交流ボランティア制度を組織し、2009 年度は 128 人の留学生が登録し、そのうちのべ 78 人を東広島市教育委員会と共催で国際理解教育事業へ派遣している。したがって、把握しているだけでも調査での実数より多くの留学生が学外の国際交流活動に参加しているが、依然この調査だけでも 148 名がなんら学外の交流活動に参加していないというのは、問題であろう。広島大学の国際化戦略では、「地域社会・国際社会との共存」を掲げている。国際センターでは、この制度の充実と効果的な運営を行なうための専任スタッフが必要である。システムはすでに構築してきたが、より多くの留学生に地域社会で有益な交流活動を行うためには、異文化コミュニケーション能力の向上を目指したワークショップの開催（2009 年度に 1 度開催）と随時質問を受け付ける専門家による支援が必要である。

＜学外の諸活動参加状況（後期調査）＞

学外の国際交流活動に参加していますか　（人・%）

学校の国際理解教育授業		社会教育機関での活動		地域の行事		その他		いいえ	
29	10.3	18	6.4	44	15.6	23	8.2	148	52.5

次に、留学生の就職活動について現状を概観し、問題点を検討する。日本は、留学生を高度人材として日本に就職させる構えを見せているが、留学生の就職は未だ困難な状況にある。特に広島地域のように留学生の雇用が進んでいない状況下で留学生にも積極的な活動が求められるが、実際に留学生が就職活動を行なっていない比率は 68.4％にものぼる。就職活動で困っていることでは、「活動の仕方が分からない」16.0％や「情報収集の方法が分からない」7.1％が多く、驚くべきことに日本の就職活動の時期を知ってか知らずか、「研究や勉強に忙しい」が 32.6％と多く、出遅れてしまい、卒業してから就職活動を開始し始め、苦しい状況に追い込まれるのである。他大学の

ように広島大学でもキャリアセンターによる出口指導・管理が緊急に望まれるところである。

＜就職活動について＞

（人/%）

		資料収集中		セミナーに参加		履歴書送付		企業訪問・面接活動		行っていない	
24	就職活動を行っていますか	46	16.3	8	2.8	7	2.5	12	4.3	193	68.4

		就職活動の方法が分からない		情報収集の方法が分からない		履歴書の書き方が分からない		研究や勉強で忙しくて時間がない		その他	
25	就職活動で一番困っていることはなんですか	45	16.0	20	7.1	4	1.4	92	32.6	42	14.9

次に学内の国際交流活動への参加状況を検討する。これは、実は宣伝の意味をこめたものであった。留学生は掲示板をあまり見ておらず、情報収集能力が高いわけではない。アンケートに回答する間に、留学生センターでは国際交流昼食会や国際交流会を開いているのだということを知ってもらうことに意義がある。

＜学内国際交流活動参加率＞

（人）

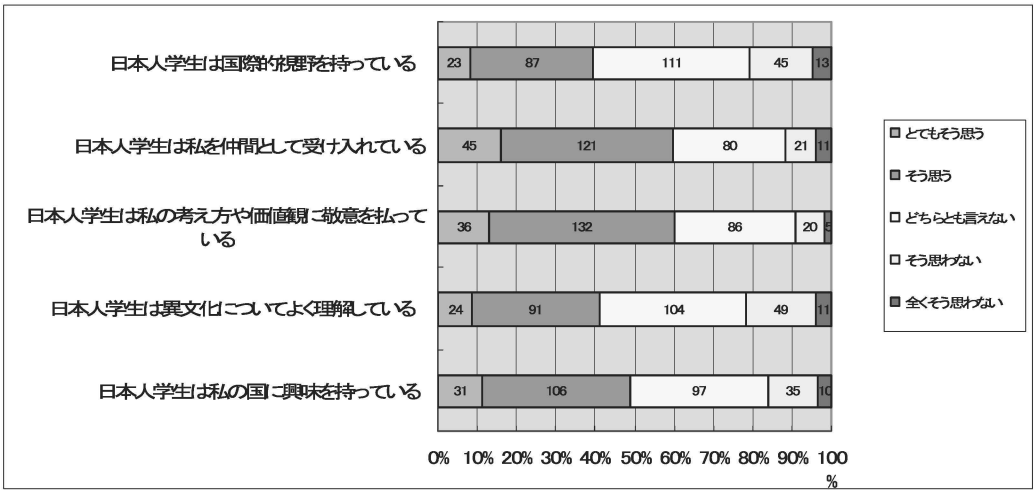
	留学生センター・国際交流昼食会	留学生センター・国際交流会	部局主催の国際交流活動	その他	いいえ
学内の国際交流活動に参加していますか。	12	31	61	17	133

	はい（人/%）		いいえ（人/%）		その他（人/%）	
学内のサークル活動に参加していますか。	45	16.0	226	80.1	1	0.4

学内のサークルにも参加できないと思い込んでいる留学生も多い。実際に参加している人は 45 人だけであった。日本人や文化・社会を知り、適応するためには、サークル活動への参加は非常に有効である。広島大学では、新しい留学生には 1 年間にわたって学生チューターがつくが、それは未経験者も含む一人の日本人学生で、研修を受けたこともなく、到底、留学生の異文化適応支援や学習支援のすべてをカバーできるわけではない。留学生数も千人を超え、大学側も予算や人員削減の中、従来のような留学生支援は行なえない状況となっている。サークル活動への参加を通して、より自然な友人関係が大きな支援となると思われる。これは、日本人学生にとっては大きな挑戦であり、日々の活動において異文化間において発生しやすい葛藤を経験し、苦労することも予想がつく。しかし、留学生の受け入れは、日本人学生が留学しなくても国際的な感覚やスキルを向上させるための制度でもある。この状況をチャンスだと考えるよう、学生の意識改革をさせる必要がある。サークル顧問の先生方への大学からの働きかけが必要である。

次に、下記の図からは留学生は、日本人学生が国際的視野・異文化理解能力・関心を持っていないと見ていることがみてとれる。異文化理解関係の講義やプロジェクトを増やしていかなければ、自然に育つどころか異文化摩擦は広がる一方であることは、社会全般のグローバル化に伴う一連の問題をみても明らかである。体系化された異文化理解関連の講義やプログラムの開講は、広島大学の教養教育として必須であろう。

＜日本人と留学生の関係性＞



最後に留学生の情報へのアクセス状況について検討する。

＜留学生の情報収集状況＞

（人/%）

	はい		いいえ		その他	
あなたはもみじに登録していますか	260	92.2	38	13.5	3	1.1
あなたは　緊急事態の時に非難する場所を知っていますか	115	40.8	122	43.3	41	14.5
あなたは、豚インフルエンザへの対応についての知らせを受け取りましたか	205	72.7	64	22.7	9	3.2

	毎日		週一回		月に一回		いいえ	
あなたは学生支援室の掲示板を確認するようにしていますか	44	15.6	123	43.6	63	22.3	49	17.4

留学生の中にはまだもみじに登録していない人が 13.5％も存在する。そして、憂慮すべき点は、43.3%が緊急事態の際の避難場所を知らないことである。神戸地震の災害の教訓が、広島大学で活かされていない。また、掲示板の確認も月に一回という回答が 22.3％、見ていない人が 17.4％もいる。年に２，３人は「奨学金や授業料免除の期限が過ぎていた、なんとかならないか」という相談がくる。無論、自己責任であるが、情報がどこにあるのか、いかに重要なのかを知らせなければならない。

４．留学生の満足度の特徴

（１）前期後期の満足度

平均値はほぼ同じで、概ね満足している傾向を示している。指導教員への満足度はいずれも非常に高い数値を示している。最も満足度が低いのは、授業の理解である。これは、前述したように言語能力が影響しているといえよう。

満足度指標	平均値＊ 前期	後期
指導教員は，研究について適切な助言をしてくれる	4.4	4.5
研究室の人たちは，いろいろな助言をしてくれる	3.9	4.1
カリキュラムは，わたしの希望した通りのものである	3.8	3.9
授業の内容は分かりやすい	3.6	3.7
広島大学 HP から必要な情報は収集しやすい	3.7	3.8
チューターは手助けをしてくれる	3.8	3.9
広島大学での私の研究はうまくいっている	3.9	3.9
総合的に判断して，大学の授業や研究に満足している	4.0	4.1
総合的に判断して，日常の生活に満足している	3.8	3.9

＊「全く満足していない」1から「とても満足している」5の平均値

5. 自由記述にみる留学生の抱える問題

(1)自由記述の特徴

前期調査では、回答者 282 人中 66 人の留学生から自由記述へのコメントがあった。日本語授業の拡充や英語による情報充実の要求が最も多く、ついで国際交流の場や情報提供要求が多く見られた。これまでと違い、キャンパス施設への要求が増えており、住居や経済問題の苦情が減っている。要求しても仕方がないことが分かったとも言える。個人対応のための連絡先がなく、個別対応できないことが多いが、アルバイト情報については生協が担当しているという情報提供や国際交流昼食会などの情報提供を留学生センターHPなどで対応。また、英語情報と日本語クラスの拡充、就職活動支援、キャンパス問題などは大学が組織的に対応すべきである。

後期は、全員へのフィードバックの難しさを考慮して、連絡先を書くようにしていなかったため、回答数も減っている。内容は前期と同様の傾向を示していた。

(2)自由記述意見へのフィードバックとしての心理相談

心理臨床家として“常にクライエントや他者を丸ごと一人の人として（鑪，2000，p. 14)”扱うことは重要であり、留学生の心理相談をする上でも同様である[1)]。しかし、留学生の心理相談を行う際、留学生の文化背景を考慮することを忘れてはならない。それは、鑪（2000）が指摘する心理臨床家の3つの機能である心理アセスメント、心理学的処遇・援助、研究のいずれにおいても重要である。学習意欲や対人関係について悩み、来談する留学生が多いが、母国文化と日本文化との文化差の問題が絡んでいることが多い。「日本のマナーや文化などに関した授業・座談会などがあったら、助かります。日本のマナー多いから、よく分かりません。例えば、年上の方との付き合いや教授たちとのやりとり・電話用語、手紙・年賀状の書き方など。」という留学生の意見からも窺えるように、日本独特の対人関係の持ち方があり、それを理解することは留学生にとって大きな課題となる。

例えば、日本人である教員や学生との関係について悩む留学生の多くは、日本人である教員や学生の言動の理解に苦しむケースが多い。教員の指導方法や研究室の使用方法など、

日本人である教員や学生にとっては当たり前のことも、留学生にとっては不可解であり、差別を受けているように感じることさえある。また、指導教員や先輩への接し方など、日本人に馴染みのない言動を留学生がとった場合、日本人である教員や学生は理解に苦しみ、留学生に対してネガティブな印象を抱き、留学生との関係を育むことはしない。「日本人の友達とどう付き合えばいいですか、時々困ります。」と、日本人との対人関係について悩んでいる留学生は少なくはない。

言葉も通じない、文化も理解できない、異文化である日本に一人で留学している留学生の不安は高く、大きなストレスを抱えており、苛立ちや怒りさえ感じている場合がある。想像していた以上に困難な生活状況、言葉の通じなさ、不適切と思われる扱い、などにより自信をなくし、劣等感を抱いている場合も多く、日本人による何気ない言動を被害的に受け取る場合がある(必ずしも、そうであると述べているのではないことに注意してほしい)。このような留学生が陥りやすい負のスパイラルより、対人関係の問題は生じやすくなり、心身の健康問題、学習意欲の低下、不適応問題、などに発展する。

留学生が日本で有意義な学生生活を送るためにも、日本人が留学生を快くサポートするためにも、お互いの文化背景を理解するための支援体制を整え、そこに支援を仰げるように広報していかなくてはならない。つまり、留学生“個人”の文化に注目し、日本文化についてもしっかり伝えることが必要となる。留学生の主張を聴き、結果のみを伝えるのではなく、理由についても説明し、不適切に扱っているのではないというメッセージを伝えることが重要である。

留学生が留学先として日本を選択した理由は様々だが、日本に対して肯定的印象を抱いていたことは共通しているように思われる。そして、「留学生と地元の学生さんとの交流活動をもっとしていただければありがたいと思います」など、日本人との交流を望んでいる声は多い。また、対日態度と対異文化態度が関連していること（山崎・平・中村・横山，1997） からも、“ボタンの掛け違い”が生じる前に、留学生と日本人がお互いを理解できるような支援体制を整え、異文化交流を広められるような支援体制を整えるべきである[2)]。

6. 留学生に対する図書館による学術情報支援

(1)留学生と大学図書館

大学の国際化を目標として掲げる広島大学では、年々留学生数が増加している。その中には、日本語によるコミュニケーションが困難な学生や、英語が母国語ではない学生が存在する。

学術情報を提供し学習・教育・研究支援を行う大学図書館では、従来留学生に対する支援の必要性が論じられてきた。特に英語圏にある大学図書館においては、言語・文化の違いが障害となり、学術情報の入手や利用が必ずしも円滑に行えない留学生の状況調査や支援方法の研究が行われている[3),4),5),6),7)]。しかし、日本においては、留学生に対する言語・文化の違いを考慮した支援の必要性は認識されているものの、具体的状況の調査報告はまだ少数にとどまる[8),9),10)]。各大学図書館では努力を続けているが、支援方法やその効果が十分に研究されているとは言い難い。

留学生が言語・文化の違いにより抱えるコミュニケーション上の障害は、英語圏の大学と日本

の大学の間では大きな相違があると考えられる。英語圏では、留学生はあるレベルの英語能力を持って大学へ入学する。さらに、大学での学習経験を重ねるにつれ、英語によるコミュニケーションレベルは向上する。対して日本では、必ずしもすべての留学生が日本語能力を持って入学するとは限らない。特に大学院レベルでは、多くの大学が英語で修了することが可能な課程を提供している。また、入学審査にあたって、日本語能力があまり考慮されない場合もある。キャンパス内の留学生が増え、英語での授業を開講することは、日本人学生の意識向上と大学の国際化という目標の実現に大きな役割を果たす。しかしながら、大多数の大学では、日常のコミュニケーションは基本的に日本語である。指導教員による研究指導については必要な場合は英語で行われていると考えられるが、同じ研究室・ゼミに所属する日本人学生が潤滑なコミュニケーションのできる英語力をもつとは限らない。留学生を支援する大学職員や図書館員の言語能力についても同様である。留学生が大学生活をおくる数年の間に、留学生の日本語能力・留学生を取り巻く人間の英語能力に目覚ましい向上を期待するのは現実的ではない。まして、学術コミュニケーションに必要なレベルの言語能力を短期間に獲得するのは、双方にとって至難の業であろう。

広島大学図書館では、毎年前期・後期に留学生向け図書館オリエンテーションを英語・日本語の両言語により実施しており、数字の上では約半数の留学生が、いずれかの時期にいずれかのプログラムに参加していると考えられる。今回の留学生支援調査で得たデータをもとに、留学生が抱える学術情報に関するコミュニケーションの状況や、図書館コレクション・サービスへの知識について考察し、図書館オリエンテーションの効果を検証する。

(2)留学生の学術情報コミュニケーションにおける状況

後期調査では、回答の約 95%が大学院生・研究生からのものである。よって、以下の分析は大学院生・研究生を対象に行った。本調査結果を大学院生・研究生に限定した場合、回答数は全対象者 950 名中 276 名、回答率は 29.1%となった。

		日本語能力					英語能力(比率)	
		よくできる	まあまあできる	あまりできない	まったくできない	無回答	%	%(累積)
英語能力	よくできる	10	7	9	24	0	18.1	18.1
	まあまあできる	25	47	43	32	1	53.6	71.7
	あまりできない	15	37	11	5	0	24.6	96.4
	まったくできない	2	3	2	1	0	2.9	99.3
	無回答	2	0	0	0	0	0.7	100.0
日本語能力(比率)	%	19.6	34.1	23.6	22.5	0.4		
	%(累積)	19.6	53.6	77.2	99.6	100.0		

表 1. 入学時の言語能力

英語圏では、言語の違いにより留学生がコミュニケーション上のハンディを抱えていることが報告されている。今回の調査で入学時の言語能力を質問したところ、英語に関しては 71.7%の学生がよくできる・まあまあできると自己評価したのに対し、日本語に関しては 53.6%にとどまった。また、22.5%の学生が、入学時にはまったく日本語はできなかったと回答している(表1)。

留学生の中には、英語・日本語両方の言語能力をもつものがいる。どちらかというと英語が

得意な学生と日本語が得意な学生の割合を比較すると、日本語の方が英語より得意だった学生 30.8%に対し、英語の方が日本語より得意だった学生は44.0%であった(表 2)。

言語能力	回答数	%
英語＜日本語	84	30.8
英語＝日本語	69	25.3
英語＞日本語	120	44.0

表 2. 言語能力の比較

研究室での会話が留学生の得意とする言語で行われているなら、言語によるコミュニケーション上の問題は、心理的には緩和されるはずである。そこで、指導教員との、あるいは研究室における会話言語を質問した。指導教員との会話が日本語で行われている割合は 66.7%、研究室における仲間同士の会話が日本語で行われている割合は66.3%であった(表 3)。つまり、少なくとも10%の留学生が、より不得意な言語でのコミュニケーションを行っているということになる。

使用言語	会話相手			
	指導教員	%	学生	%
日本語	184	66.7	183	66.3
英語	100	36.2	84	30.4
他言語	5	1.8	25	9.1
無回答	0	0	6	2.2

表 3. 研究室での使用言語

では、言語能力と学術情報に関する情報量には関連があるだろうか。まず、図書館オリエンテーションの中で紹介するコレクション・サービス項目を取り上げ、周知度を測った(図 1)。

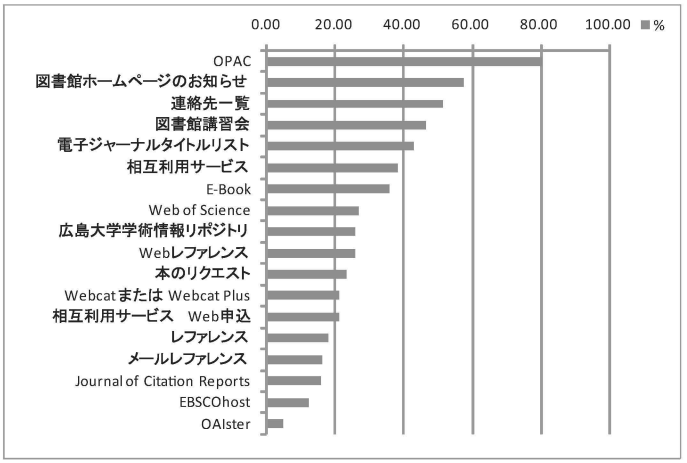


図 1. 図書館サービスに関する知識

研究分野により、利用するコレクションやデータベース、サービスには差がある。よってこの調査では、各コレクションやサービスを利用しているかどうかではなく、各項目の存在を知っているかどうかを質問した。

知られている項目のうち上位には、OPAC・電子ジャーナルタイトルリストが含まれる。この 2 つは、広島大学における学術情報コレクション利用に欠かせないことを考えれば、留学生が最も必要とし、また研究の際に必ず教えられる項目であるとみなしていいだろう。図書館ホームページもよく参照されているようである。図書館が重要な学術情報ソースだという認識の現れだと思われる。図書館各担当の連絡先一覧および図書館オリエンテーション情報が上位にあるのは、学術情報の収集に関して、コレクション・サービスについての知識が必要であり、図書館はその支援をするはずだという期待があるためだと推測される。

	入学時の言語能力	知識レベル
日本語	よくできる or まあまあできる	5.28
	あまりできない or まったくできない	3.49
英語	よくできる or まあまあできる	6.11
	あまりできない or まったくできない	4.43

表 4. 図書館サービスに関する知識

1 項目 1 ポイントとして、言語レベル別に知識レベルを比較した。日本語・英語にかかわらず、

言語能力の高い学生の方が知識レベルも高くなっている。(表 4)

次に、日本語能力別に、図書館オリエンテーション参加者・不参加者の知識レベルと、参加者のオリエンテーション満足度を比較した(表 5)。留学生を1.オリエンテーションに参加した日本語能力の高いグループ、2.オリエンテーションに参加した日本語能力の低いグループ、3.オリエンテーション不参加の日本語能力の低いグループ、4.オリエンテーション不参加の日本語能力の高いグループに分け比較すると、最も知識量が多かったのは、2.オリエンテーションに参加した日本語能力の低いグループである。日本語能力の低いグループは、英語によるオリエンテーションを受けたと考えられる。留学生に対する英語による学習・研究支援の必要性が実感できる。

日本語能力	不参加	参加	
	知識レベル	知識レベル	満足度
よくできる or まあまあできる	4.97	6.34	1.76
あまりできない or まったくできない	4.79	7.73	1.99

表 5.図書館オリエンテーション不参加者・参加者の知識レベルと満足度(日本語能力別)

参加満足度は、「1.とても満足した」から「5.とても不満だった」までの 5 段階評価で、ポイントが少ないほど満足度は高い。日本語能力の低いグループは、最も知識量が多く図書館オリエンテーションの効果があがったと考えられるにも関わらず、オリエンテーション参加満足度については日本語能力の高いグループより低い。その原因としては、日常のコミュニケーションにおいて知識を得ることが困難である彼らは、図書館オリエンテーションに高い期待度を持って参加したため、結果的に満足度がやや低く抑えられたのではないかと推測する。

今回の調査により、図書館コレクションとサービスに関する情報の取得に関して、留学生が置かれている状況の一端が明らかになった。図書館オリエンテーションが効果をあげており、図書館サービスへの意識・期待感も高いという結果は、図書館としては責任が重くもあるが、嬉しいことでもある。今後も学習・研究支援サービスの向上をはかり、大学の一員として国際化という目標に貢献できるよう努力したいと考える。

参考文献

1)鑪幹八郎 (2000). 心理臨床家の現況とアイデンティティ　鑪幹八郎・名島潤慈 (編新版　心理臨床家の手引　誠信書房　pp. 1-16.

2) 山崎瑞紀・平　直樹・中村俊哉・横山　剛 (1997). アジア系留学生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割　教育心理学研究, 45, pp. 119-128.

3) Allen, M. B. (1993). International students in academic libraries: A user survey. *College and Research Libraries, 54*(4), pp. 323-333.

4) Fan, A. (2009). Creating a bilingual library information environment for foreign users. *Electronic Library, 27*(2), pp.237-246.

5) Jackson, P. A. (2005). Incoming international students and the library: a survey. *Reference Services Review, 33* (2), pp.197-209.

6) Morrissey, R., & Given, L. M. (2006). International Students and the Academic Library: A Case Study. *The Canadian Journal of Information and Library Science, 30*(3/4), pp.

221-239.
7) Li, Z. (2006). Communication in academic libraries: an East Asian perspective. *Reference Services Review, 43*(1), pp.164-176.
8) 三浦逸雄，呉凱，顧銘，芳鐘冬樹．(2002). 東京大学における外国人留学生の図書館・情報サービス利用の実態:アンケート調査の結果と分析．東京大学大学院教育学研究科紀要，*42*, pp.349-367.
9) 奥山智紀，芳鐘冬樹，顧銘，呉凱，三浦逸雄．(2003). プロフィール別に見る留学生の図書館・情報サービス利用:東京大学における実態調査の分析から．名古屋大学附属図書館研究年報，*2*, pp. 31-41.
10) 土田大輔，仲山加奈子，西脇亜由子，矢野恵子．(2007). 大学図書館のアウトリーチサービス(2) 外国人利用者に関する調査報告(留学生アンケートを中心に). 図書の譜，*11*, pp. 206-252.

執筆者所属：
庄ゆかり（広島大学総合科学研究科大学院博士課程）
小島奈々恵（広島大学教育学研究科大学院博士課程）